

戊辰戦争における

郡上藩凌霜隊について（08・1・19）

朝比奈 隆（昭25・理）

はじめに

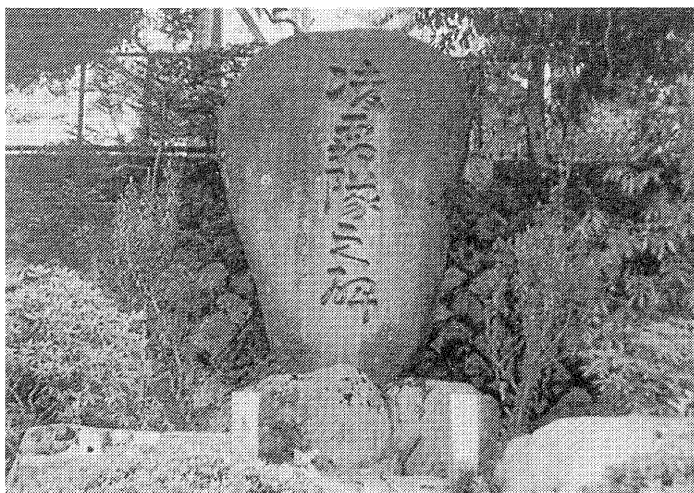
只今ご紹介頂きました朝比奈でございます。

平成十九年秋の三木会の旅行で福島県会津の鶴ヶ城（若松城）を訪れた方は、ご覧になったかもしれません。鶴ヶ城から三三程離れた所にある白虎隊で有名な飯盛山の山上に「凌霜隊之碑」が建っており、また、岐阜県郡上市の岸剣神社にも同様な「凌霜隊之碑」が建っております。

この凌霜隊は美濃国（岐阜県）郡上藩の藩士が結成したもので、明治初年の戊辰戦争で東軍（徳川幕府軍）方に付き、郡上八幡から遠く離れた会津の鶴ヶ城まで各所で西軍（薩長軍）と戦いながら応援にかけつけました。最後は会津の飯盛山で生き残った白虎隊と合



会津飯盛山上の凌霜隊碑



岐阜県郡上市の凌霜隊碑

流し、西軍の重囲を突いて鶴ヶ城に入り、籠城戦に参加しました。二箇所の凌霜隊碑はこれを慰霊、記念して建てられたものです。凌霜隊の名は、郡上藩主青山家の「葉菊の紋」からとったもので葉菊は霜を凌ぐという不撓不屈の精神を象徴しています。

私事になりますが、私の先祖が凌霜隊に参加して戦いましたので、その概要と後日談、歴史上の評価等をお話し致します。

東軍応援の理由

何故、美濃国郡上藩がはるばると、あまり縁の無い東北の会津藩まで応援に行つたのでしょうか。慶應三年、十五代將軍徳川慶喜が大政奉還したものの、朝廷も徳川幕府もどのような政治体制をとれば良いのか、はっきりした構想を持っていなかった様でした。

当時の孝明天皇は会津藩主松平容保を信頼され、京都の守護を会津藩に命じておられました。しかし、孝明天皇が急逝された後、薩摩・長州は十六歳の明治天皇を擁し王政復古の大号令を発し、全国の諸藩にどちらに付くか報告を命じました。これは実質薩長が政権を握るということでした。

慶應四年（明治元年）鳥羽伏見の戦いから始まった戊辰戦争に対応し、全国の諸藩の指

導者達は西軍に付くか東軍に付くか、めまぐるしく転換する時代の中で、「勝てば官軍」の言葉どおり、勝つ方に付きたいと生き残りに苦慮しました。

郡上藩は四万八千石の小藩で、藩論が二分するなか、当時の藩主、青山幸宣は十四歳で裁断の実力が無く、国家老鈴木兵左衛門と江戸家老朝比奈藤兵衛らが主に計ったものと思われまふ。この朝比奈藤兵衛が私の曾祖父でございます。

郡上藩は先が読めぬので、結論として、生き残るためどちらが勝っても藩が取り潰しにならぬ様、二股作戦を取ることとしました。即ち、藩として公式には西軍に味方する一方、東軍応援のため凌霜隊を組織して無届脱藩の形で秘かに出陣させることにしたのです。

凌霜隊の立場、使命、構成

この凌霜隊の立場ですが、藩としては表面上西軍に味方しているので、凌霜隊が出発したら無届脱藩者として西軍に届け出ます。西軍が勝てば凌霜隊は新政府から「朝敵」として罪を問われ、藩からは「脱藩者」として処分されます。藩は東軍が勝って徳川幕府が復活した場合に備えて「失節の罪」を問われないように義理をはたしておこうと考えたわけ、まことに損な役割でした。

しかし、これまでの藩と徳川幕府との深い関係から見ても、この際、東軍を応援することが「道義を貫く」ことであり、徳川家だけを新政府に参加させないような薩長のやりかたは公明を欠いており、「明治新政権の確立」は薩長の野望を実現するうたい文句にすぎない、真に全日本的な維新を断行するためには会津軍を勝たせるのが愛国の道であると信じて、元氣な藩士は、続々志願しました。

隊員は白兵戦を予想して剣道の達人を揃え、軍医、砲術、工兵、歩兵の将校も居りました。また最新式の銃、大砲、弾丸、薬剤、食糧、軍服なども十分用意し、豊富な軍資金を与えられました。隊員数は四十五名（国許班十五名、江戸班三十名）他に客員二名（幕府旗本および会津藩士）で出発時総員四十七名となりました。

隊長に推薦された坂田林左衛門（五十二歳）は高齢を理由に隊長を辞退しました。そのため国許の藩主より朝比奈家老の長男で剣道の達人だった茂吉（十七歳）を隊長に指名してきました。朝比奈家老は反対でしたが藩主の命令なので止むをえず息子を隊長に命じました。坂田は副長を命じられました。

その他「隊員名簿」

副長 速水 小三郎 （四十七歳）

小出 於菟二郎（四十四歳）

氏井 儀左衛門（四十一歳）

菅沼 銃十郎	(四十二歳)	尾島 左太夫	(三十七歳)
中岡 弾之丞	(二十五歳)	田中 亀太郎	(二十九歳)
小野 三秋	(四十六歳)	岡本 文造	(三十九歳)
矢野原 与七	(三十九歳)	鈴木 三蔵	(三十五歳)
武井 安三	(四十四歳)	石井 音次郎	(二十歳)
桑原 鑑次郎	(二十三歳)	米沢 小源治	(三十四歳)
松尾 才治	(二十六歳)	山脇 金太郎	(十七歳)
売間 直次	(三十三歳)	中瀬 鐘太郎	(二十二歳)
池尾 幾三郎	(二十六歳)	山片 俊三	(三十五歳)
山脇 楸橘	(二十歳)	齊藤 巳喜之助	(二十四歳)
浅井 晴次郎	(二十二歳)	牧野 平蔵	(三十歳)
金子 勇次郎	(四十一歳)	小泉 勇次郎	(二十一歳)
土井 重造	(三十六歳)	白岩 源助	(三十七歳)
山田 熊之助	(二十四歳)	齊藤 弥門	(四十一歳)
中村 国之助	(二十五歳)	山田 惣太郎	(二十二歳)
野田 弥助	(二十八歳)	安村 敬三郎	(二十三歳)

岸本 伊兵衛 (四十一歳) 林 定三郎 (二十五歳)

(小物) 孫太郎 源蔵 藤平 久七 久次郎 小三郎

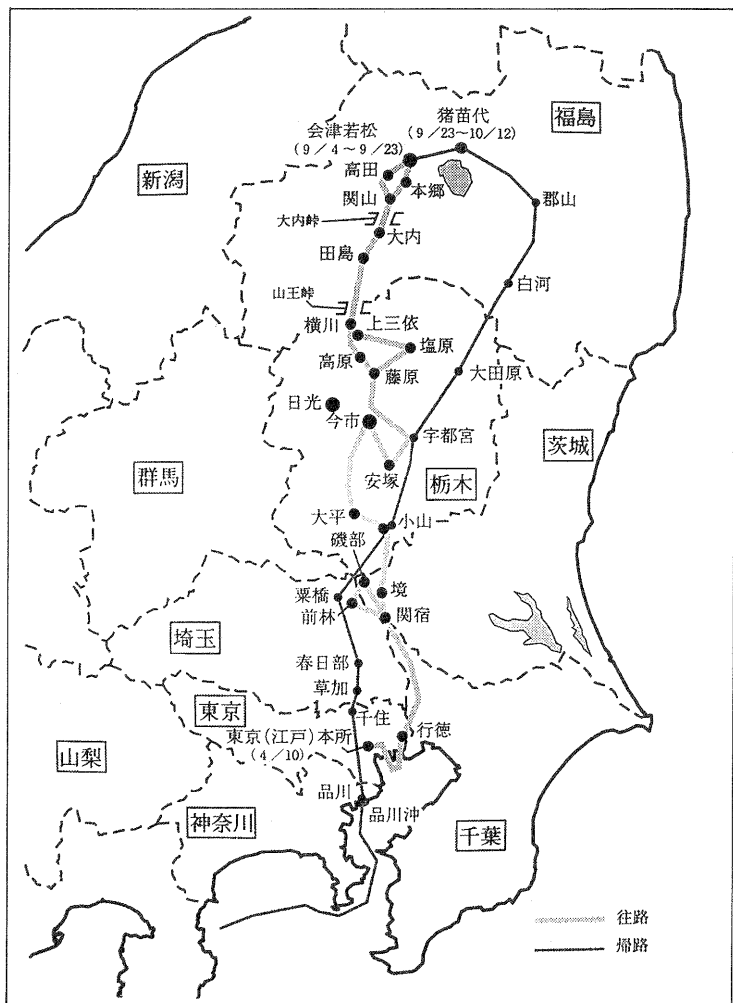
戦いの経過

明治元年三月二十日、郡上八幡より十五名出發し四月十日江戸に集合、江戸班と合流して船で行徳に出發しました。これは江戸城が無血開城し、幕府の兵器がすべて西軍に引き渡された四月十一日の前日でした。

関東各地は西軍の薩摩、長州、土佐、大垣その他各藩の兵が会津藩討伐のため北上しています。この情勢の中、凌霜隊などの徳川応援部隊は会津藩の指揮下に入り、日光に集結しようと小山、宇都宮ほか各所で西軍と戦い北上しました。

凌霜隊の動きは詳しく記録されていますが全体を理解して頂くために、行動表を記載します。

凌霜隊は戦死八名、行方不明二名で、生き残った者も多くが負傷したり病気にかかっていたと聞きます。



凌霜隊行動概念図

(出典：凌霜隊戦記 心苦雑記と郡上の明治維新)

明治元年

- 3月20日 美濃（岐阜県）郡上藩国許班山田熊之助ら15名、八幡城下出発。中仙道へ
- 4月10日 江戸本所、中の橋、菊屋に集合、乗船出発
- 12日 下総行徳（千葉県）上陸、再び乗船、江戸川廻上、関宿（千葉県）を経て前林（茨城県）上陸
- 16日 下野小山（栃木県）で大鳥圭介軍、貫義隊と共に西軍と戦い大勝
- 20日 日光今市（栃木県）で会津藩兵と合併
- 22日 宇都宮（栃木県）入城
- 23日 宇都宮激戦退却
- 5月11日 会津藩の命により塩原（栃木県）守備（約3ヶ月）
- 8月23日 上三依（栃木県）に出る
- 25日 横川（栃木県）戦闘
- 28日 田島（福島県）に前進
- 30日 大内（福島県）にて激戦
- 9月1日 大内峠にて激戦
- 2～4日 関山にて激戦、鶴ヶ城下に入る
- 6日 鶴ヶ城に入る（一部は4日）
- 23日 落城、武装解除、猪苗代（福島県）で謹慎
- 10月12日 長州、大垣、両藩の護衛で東京へ出発
- 24日 東京千住着、郡上藩に引渡し、同夜船で品川沖へ
- 26日 品川出帆
- 29日 遠州灘（静岡県）で難破、救助される
- 11月17日 郡上藩揚屋収容

明治2年

- 5月23日 領内寺院周旋により揚屋から長敬寺に移る
- 9月23日 禁錮を解き家庭・親戚で謹慎

明治3年

- 2月19日 謹慎を解く
- 3月23日 赦免

戦中の挿話

凌霜隊は途中、会津藩軍事総督山川大藏の指令により、会津軍百三十名と共に野州（栃木県）塩原村で会津への街道を側面から防衛する命令を受け、三ヶ月程駐屯しました。しかし次第に戦力を増してゆく西軍に押され、鶴ヶ城のある若松方面の形勢が急変、早く鶴ヶ城守備のため引き上げよとの命令により会津に向いました。塩原を去る時、建物を西軍に利用されぬ様、一軒も残らず焼き払って引き揚げよと指令されました。

凌霜隊は三ヶ月間宿泊した和泉屋、丸屋を、戦いがすんだらすぐ組立てられるように全隊員が手伝って丁寧に解体しました。天井板から床板までとり外し「たるき」や「ぬき」までに番号を打ちました。

また、住職の法話を聞いたり座禅をしたり剣術等をしていろいろお世話になった臨濟宗妙心寺派妙雲寺を焼き払うに忍びず、お寺だけは残そうと会津藩と交渉するが許されないで、止むを得ず焼く用意を始めたところ、本堂の格子天井の縦横十一列に八列の枠の中に大きな菊の御紋章が合計八十八個も描いてあることが分りました。副長で学者の速水に相談しましたが、藩主の青山家が南朝の忠臣の末孫であることを思うとこんな立派な御紋

章を灰にすることは出来ない、では筆でバッテンをつけよう、消せば無かったことになる、ということで庫裡から硯と筆と物干し竿を借り、竿に筆を結びつけ一つ一つの紋章にバッテンをつけました。

しかし檀徒達が仏様にお詫びのお経をあげに来てゐるのに気が付いて、やはり火をつけるに忍びず、いろいろ考えた末、お寺から離れた所に藁、薪、畳を集めて火をつけ、お寺が燃えているようにみせかけてすぐに出発しました。これによりお寺は焼失から守られました。この妙雲寺は現在でも残っており、私も訪ねましたが天井のバッテンは今も残っております。後でお話しますが、この時お寺を守ったことが後に凌霜隊員の生命を救うことになりました。

敗戦後の経過

鶴ヶ城で降伏した東軍は約五千六百名で、この内、旧幕府兵及び他藩脱走兵の約六百名は出身藩へ戻すため東京（江戸は東京に変わっていた）へ護送されることとなりました。凌霜隊は重傷者を除く三十名が西軍に護送され、東京で郡上藩に引き渡されました。東京迄の他藩による護送の警護はあまり厳しくなく、むしろ友好的な藩もあった様ですが郡上

藩の凌霜隊に対する対応は厳しく、東京で休養することを許さず、直ちに千住から船で品川を経て鳥羽へ護送されました。途中、船が遠州灘で嵐のため沈没しましたが奇跡的に他の船に救助されました。鳥羽から松阪、四日市、大垣を経て十一月十七日郡上八幡に到着しました。

凌霜隊は実質、藩の命令で出発したのですが、東軍の敗戦により脱藩者で賊軍となったため、藩の凌霜隊に対する態度は新政府の手前、次第に厳しくなってきました。

郡上藩での処置

新政府からは「脱走兵は各藩で謹慎」という命令でしたが、郡上藩では揚屋（あがりや・刑務所）で拘置しました。この揚屋の環境は極めて悪く、病人が続出しました。

当初、藩は凌霜隊の使命についての口封じの為もあり、全員を死刑にするつもりでしたが、朝廷から「こんどの戦争の後始末はなるべく穏便にされたい」との意向があったので、隊長、副長二名の三名を首謀者として斬首し、その首を朝廷に差し出して脱走兵参戦のお詫びをすることに計画を変えました。しかしそれも朝廷より「見合わせよ」との指図だったので取り止めたそうです。

隊員の一人岡本文造は優れた漢詩人で、凌霜隊と行動中多くの漢詩を作りました。揚屋の生活の一部を知る為の参考に彼の漢詩を現代文に訳した解説文をご紹介します。

『……凌霜隊員が揚屋に入れられた十一月中旬以降は、旧曆であるから真冬であつた。冬の郡上は雪が降つて寒さが厳しい。「雪夜通宵睡られず、慈恩禅寺托鉢の僧有り」と題して、「山城夜静かにして雪花堆し、寒さ床頭に逼り睡媒を失う、忽ち怪しむ前街に人語の沸くを、慈恩の雲水山を出でて来る」とある詩は、郡上に入つて二つ目の詩であるからおそらく十一月十七日揚屋入りから程遠からぬ時の作詩であろう。雪が降り、寒さで眠られずにいると揚屋の前の街路で慈恩寺の托鉢僧の声がしたのである。慈恩寺は臨濟宗の寺で、揚屋はその近くにあつた。

四つ目の詩にも「寒さ甚だしく終夜眠られず」と題して、「雪は四山に没し冷たきこと骨を徹す、温袍一個眠るを為さず、独り燈火を傍らに寒枕をそばだつ、積翠城頭七鼓の天」とあり、粗末などてらをまといつて寒さの為眠ることができず午前四時に到つたことが詠まれている。……揚屋の中での集団幽閉生活の様子を語るものとして「監闌（かんらん）中戯れに作る」と題して詠まれた「一舎に雑居す十二人、算え来りて恰も幹支辰（かんししん）の如し、循環して日夜業に就くと雖も、滔滔たる談声事純ならず」という詩が

ある。凌霜隊員で揚屋に入ったのは二十九人、これが二舎あるいは三舎に分けて収容されていたのであろう。岡本の獄舎には十二人が雑居していたことがわかる。大の男が終日一舎に閉じ込められているのであるから「滔滔たる談声」が絶えなかったであらう。……揚屋へ入ってから三ヶ月の間、一度も入浴の機会が無かったことが、「春九句を送りすでに今に到り、又一浴の塵簪（じんしん）を掃う無し、願わくは飛瀑竜門の水を將（も）って、来たりて粉埃（ふんあい）を洗い汚襟（おきん）に快きを」という詩でわかる…』

藩の態度があまりに厳しいので凌霜隊内の知恵者が秘かに外部と連絡をした結果、臨濟宗妙心寺派の慈恩寺の住職が代表し領内の全寺院が宗派を超えて協力し立ち上がり、「凌霜隊員の待遇を改善すること、もし改善されなければ明治政府に申し出る」などと申し出て、藩と交渉して、明治二年五月環境の良い長敬寺に預かることとなりました。この裏には先にお話しました塩原で戦火からの焼失を守った妙雲寺の住職が凌霜隊の功績を妙心寺派の大本山に報告し、大本山から郡上の慈恩寺へ連絡があり、仏教界の恩人を救えという運動になったと聞いております。慈恩寺は朝比奈家の菩提寺で、現在も十数基の先祖の墓があります。

その後明治二年九月自宅謹慎となり、明治三年三月二十三日赦免となり、やっと犯罪人

でなくなり郡上藩士に戻りました。

しかし郡上藩は明治新政府に迎合し、凌霜隊関係者を役職に就けず、待遇は悪かった様です。

朝比奈家老は会津に味方し、脱走者に出張と称して武器、資金を与えたという責任者にされ、二千石の江戸家老から屋敷、知行取りあげ隠居、長男茂吉は廃嫡し父の生家江州（滋賀県）彦根の彦根藩側用人棕原家の養子にする。朝比奈家は次男の辰静（ときしず）が継ぐという条件で家名の存続を許されました。

私は茂吉の弟、辰静の孫ですが、幼い頃から大叔母（茂吉の妹）、父、叔父たちから凌霜隊のことをよく聞かされた記憶があります。

明治四年に廃藩置県が行われましたが、凌霜隊員にはその後も「朝敵」の名がつきまわって、社会生活にも困るので名前を変えた者や、他の土地に移住した者も多いので凌霜隊員でその後の消息の分かっている人は極めて僅かです。

凌霜隊員の末裔で私が直接お会いしたのは棕原家以外では前記の岡本文造の弟のひ孫に当たる岡本周一（けいいち）氏だけです。同氏は岡本文造の詩集をまとめて出版された方で、奇しくも私の住まいがあります川崎市麻生区の臨済宗香林寺の住職をされております。

後日談

朝比奈茂吉は、棕原家の養子になり、名も義彦と改めました。親分肌で面倒見が良く、彦根に家建て、郡上八幡から父一家を引き移らせ、両親、弟妹を養いました。棕原義彦（朝比奈茂吉）は大阪兵学校に学び、彦根に住み村長、町長、県会議員を歴任し小笠原の長になり赴任する直前、明治二十七年、四十三歳の若さで脳溢血のため亡くなりました。

朝比奈藤兵衛は明治二十一年彦根で亡くなり、墓は彦根市の竜潭寺に在ります。

棕原義彦の墓は彦根市の蓮華寺に在ります。余談になりますが、八幡町の教育委員会では長い間朝比奈茂吉の墓を探していたが見付からないので数年前、私に問い合わせてきました。姓も名前も変わっているのだからなかったのでしょうか。お教えしたところ郡上市から彦根まで三〇名程の人が団体で墓参に来られました。

朝比奈茂吉の彦根に建てた家は築約百四十年になりますが、現在も一部がそのまま残っており、土蔵には朝比奈藤兵衛の肖像画、鎧兜、旗指物、陣羽織が保存されています。私も子供時代この家に住み、彦根西小学校、彦根中学校に通いました。現在は敷地の一部で私の甥が歯科医院を開業しています。

歴史の評価

郡上八幡町（現在岐阜県、郡上市八幡町）の町史には当時の藩の公文書が掲載されていますが、当然ながら凌霜隊の名称、行動について全く触れておらず、青山家家臣由緒書の朝比奈藤兵衛の欄の後の方の処分理由に「……坂田林左衛門・速水小三郎始四十五人之者申立候事のみ信用致し大義を忘れ、追々不都合相かさなり、終に普代之者共三〇余人並倅茂吉迄一味の了簡にて、内々出張等の虚名を以って武器、金子等迄相渡脱走せしめ……」と責任を追及しています。

凌霜隊の活躍については、反明治政府の性格からその後長い間あまり世に知られていませんでしたが、昭和になってその戦記（隊員矢野原与七著『心苦雜記』）から歴史的に掘り起こされ、研究され事実が明らかになってきました。八幡町では凌霜隊の不撓不屈の精神を受け継ぐための修養道場として昭和九年凌霜塾堂の建設が計画されました。後に新たに思想的に再構成され満州開拓団員の精神的支柱になりました。

昭和十五年隊員の藩に対する忠誠を顕彰する凌霜隊碑（隊員山田熊之助の長男、陸軍中将菊池門也氏筆）が郡上の城山本丸（当時）に建てられました。

会津飯盛山上の凌霜隊碑は昭和五十九年九月に建てられました。

八幡町では郡上踊りの開催に合わせ、毎年七月二十八日凌霜隊顕彰会の皆さんにより「凌霜隊慰霊祭」を行っています。また、現在の郡上高校の校訓は「凌霜」となっております。

新聞にもこれらの史実がいくつか掲載され広く知られる様になりました。ここに朝日新聞二編、読売新聞一編、計三編原文のまま記載します。

朝日新聞 一

(昭和十五年五月十六日 朝日新聞「天声人語」に掲載)

明治元年四月十日、凌霜隊脱兎のごとく江戸を走る。中ノ橋菊屋で勢揃いした一隊はわずかに四十名。日光街道から塩原を迂回して大内峠に出る。会津白虎隊救援がかれらの目的であった。激戦また激戦の結果、白虎隊十九勇士は屠腹したが、生き残った一隊とこの凌霜隊とは一つとなり、よく敵の重囲を突いて城中に入ることができた。かくて半数近くは戦死しながらも、なお開城のその日まで戦い抜いた。いわゆる凌霜の気魄に至っては嘆称に値する。しかるに凌霜隊とは何ものか、知る人は極めて稀であろう。稀なものも道理、史跡は多く煙滅して風霜の下、その墓所さえも荒廃、顧みるものもなきまゝに打過ぎて来たのだ。美濃郡上八幡四万八千石の青山藩は徳川譜代の臣社稷のまさに覆えるに会つては、藩内血気の徒、慨然として決起せざるを得ない。徳川三百年、譜代顔をして押通したもの

までが、にわかに風を望んで功利的に立回るものゝ多い中に、成敗利鈍を越えて恩義に殉ずるを期す。凌霜隊すなわちこの青山藩中血盟の一団、隊長朝比奈茂吉は家老朝比奈藤兵衛の息で、年齢わずかに十七歳だった。副隊長は速水小三郎行道とて、四十三歳の男盛り、皇典の学者として各方面から囑望されるところ多かつたに拘らず、一死をもってこの少年血盟隊に投じたのだ。飯盛山白虎隊墓の前には二本の石柱あり「精忠貫日月、勁節凌風霜」の文字を刻む。元来、白虎隊はその居城を護つたものだが、凌霜隊は遠く美濃郡上の積翠城から、また江戸から馳せ参じたものであつて、その犠牲的精神において断じて千古不磨の亀鑑でなければならぬ。たつた一つ東京青山の菩提寺梅窓院というにこの烈士の墓があつたそうだが、それも大震災で壊滅し、いまはどうなっているかわからぬ有様、郷国八幡の青年達、近時これを嘆き、凌霜塾堂の建設によつて烈士の魂を呼び招かんとし凌霜不撓の気魄の練磨はこれが具体的現われとして、大陸への雄々しき開拓戦士となり、義勇軍となり全国でも抜群の成績を挙げておるやにきく。知るべし山美水濃の岐阜の一天地は、凌霜隊の遺芳長く宿るところ。』

註 東京青山の梅窓院には現在、朝比奈辰陽（朝比奈藤兵衛の養父）のお墓があります。梅窓院は藩主青山家の菩提寺なので郡上八幡町との交流活動として毎年六月に境内で「郡上踊り」を開催しています。

『日本史の舞台 郡上八幡 凌霜隊、時代の捨石

幕末、美濃国郡上藩の凌霜隊（りようそうたい）のたどった道は特異である。

慶應四年（一八六八）、鳥羽・伏見の戦いに勝った官軍は、錦旗（きんき）をひるがえして東征を開始した。

各藩は揺れ動いた。四万八千石の譜代（ふだい）、郡上藩（藩主青山幸宣）では、国家老鈴木兵左衛門が恭順を京都に申し入れ、藩兵を東征軍に参加させた。一方、江戸藩邸では江戸家老朝比奈藤兵衛を中心に会津救援の部隊、凌霜隊が結成され、四月十日、本所に集合した隊士三十九人（他に小物六人）は藤兵衛の長男茂吉（一七）を隊長に会津に向った。

つまり、郡上藩からは官軍と幕軍の双方に軍隊が送られたのである。

凌霜隊は北関東を転戦、会津若松城に入り、白虎隊に付属する。九月、会津落城。隊士たちは旧藩で謹慎するよう申し渡され、十一月郡上（現郡上八幡町）に護送されるが、待っていたのは謹慎どころか罪人としての獄舎生活だった。一同が正式に釈放されたのは、約一年半後の明治三年二月のことである。

さまざまな見方がある。

どちらが勝つてもいいように両天びんをかけた、とする日和見説がやはり多い。ほかに藩論が二つに割れたのだ、とする説。脱藩者たちの暴走に過ぎぬ、とする説。さては国家老が政敵の江戸家老を陥れるための謀略だった、という権力闘争説まである。

郡上踊りで名高い地元の岐阜県郡上八幡町。町資料編集委員の鈴木義秋氏は「江戸家老の一存ではなかったか」という。郷土史家の野田直治氏も、ほぼ同じ考え。鈴木国家老について調べたが、実直な能吏型の人で、二面作戦など器用な芸当のできる人ではない。権力闘争などとはうがち過ぎだ、という。

一つの傍証、という感じで鈴木、野田両氏とも凌霜隊への地元の冷たい目についてふれられた。隊士は釈放後も旧藩士からは異端者扱いされたし、町では良い職につけなかった。昭和十年ごろまでは、地元でも凌霜隊のことを知るひとはほとんどなかったという。

「……分らないことが多いものですから。それでも、最近は時代の犠牲者、ということに評価が落ち着いたようです」と町で民芸品店を経営する詩人の水野隆氏。

地元の研究では、隊士たちは洋式装備のほか、藩金二百両を軍資金として渡されて出発した、とされている。しかも江戸づめの藩士だけでなく、国元からも十余人が参加しているのである。こうしたことすべてが江戸の一存で行われ、国元の藩当局は全く知らなかつ

た、ということがありうるだろうか。

隊士が残した記録としては、副隊長速水小三郎の日記と、隊士矢野原与七の筆とされる「心苦雜記」などがこれまでに発見されている。その心苦雜記の冒頭には、自分たちを「青山家脱走人」と記している。この短い表現に、藩の密命を受けて出陣したと信じていたに違いない隊士たちの、断腸の思いを見る。

隊士たちのその後はどうだったのか。

「子孫の方は町に二、三人残っておられます。ご自分からは、そうおっしゃいませんが……」と鈴木氏。他の土地へ移った人も多いという。

紅顔の隊長、朝比奈茂吉は地元の調査によると釈放後、彦根に移り、県議などを務めたが「酔うと、新政府を罵倒（ばとう）することが多かったそうです」と水野氏。茂吉は明治二十七年、四十三歳で脳出血のため早世した。

一方、鈴木兵左衛門は郷土史誌「郡上史談」によると、郡上藩の大参事になったが廃藩置県で失職。のち浜松県に再就職したが、不遇のうちに明治十四年、五十歳で世を去った。昭和五十五年九月、郡上八幡城の城跡の片すみに、地元ライオンズクラブの手で凌霜隊の碑が建てられた。

黒みかげ石に刻まれた隊士たちの名を見おろして、松のこずえが風に鳴っている。』

読売新聞

(平成七年十月十日 読売新聞川崎版に掲載)

「維新史」もう一つの目 佐幕の義勇軍隊士の漢詩集 敗れ幽閉 時代を詠む

麻生区 子孫の住職が発見、出版

戊辰戦争の際、藩内が勤皇、佐幕に割れる中、会津白虎隊などともに幕府側で戦った郡上藩(現・岐阜県)義勇軍「凌霜隊」の一隊士がつづった漢詩集を、一族の末えいに当たる川崎市内の住職が出版した。凌霜隊の資料は数少なく、詩としての価値に加えて、維新史の一面を知る資料としても注目されそうだ。

題して「紀行・挹源(ゆうげん)詩集」を出版したのは、同市麻生区細山三、香林寺住職岡本岡一さん(六〇)。作者の隊士・岡本文造の弟のひ孫に当たる。

収録されているのは、文造が隊に参加してから官軍に捕えられ、国元の岐阜県郡上八幡町へ護送、幽閉生活を送った約一年半の間に詠んだ漢詩二百四十九点と、漢文の従軍日記など。

漢詩は幽閉中の激憤をこめたものから、「金魚」「煙草」など、当時の生活や花鳥風月を詠んだものまでさまざまだが、幼い藩主の読書指南なども勤めた「藩随一の漢学者」の作品だけに、出版に協力した学者の評価も高い。

また、隊の転戦の様子や隊士の心中、当時の生活風俗などをしのばせる内容は、一小藩

の藩士の記録という以上に、複雑な維新史の一面を知る上で貴重な歴史的資料にもなりそう。

墨書きの原本は文造から弟の住職に託されたが、一九九二年七月、寺の金庫でこの文書を見つけた岡本住職が、あちこち照会して文造の遺稿と確認。元明治書院編集部長の森井俊彦氏が編集を引き受け、専門家による漢詩・漢文の注釈のほか、背景となる文造の人柄や凌霜隊の解説なども添えて、本に仕上げた。

有名な新撰組などと比べ、歴史に埋もれた感のある凌霜隊だが、岡本住職は「この本で凌霜隊の実像と、その時代背景などを知ってもらえたら」と、百二十五年ぶりに封印が解かれた漢詩集を手話していた。

後藤靖・立命館大名誉教授（六九）（日本近代史）の話

「凌霜隊に関する資料は殆ど残されておらず、維新期の裏話の記録として、歴史的価値は大きい。身辺の生活を題材にした漢詩が多いというが、それらに託して自分の挫折感などを語っているのでは」

註 昭和三〇年頃から凌霜隊に関して調査、発表される人が増え、これに関する記録、小説等の出版、また芝居の公演、テレビでの放映等がされました。

むすび

余談になります。資料十の芝居が郡上市で公演された時、凌霜隊ゆかりの人ということ
で私と長男が招待頂き、公演終了後壇上で挨拶させて頂いたことがあります。

また、八幡町には資料提供や、郡上踊りに招待頂いたことがあり感謝しております。
以上、私事がいろいろ入ってしまいましたが御静聴を感謝いたします。

(元・日立電子(株) 主管技師長)

主な参考資料

一 「鶴ヶ城を陥すな 戊辰戦犯の悲歌 凌霜隊始末記」 藤田清雄 (昭和三十七年 謙光社)

二 「凌霜隊戦記 心苦雜記と郡上の明治維新」 高橋教雄 (平成十四年 八幡町教育委員会)

三 「郡上八幡史 資料編」 (昭和六十一年 八幡町)

四 「紀行・挹源詩集 郡上藩凌霜隊・岡本文造遺稿」 (平成七年 川崎市 香林寺)

- 五 「葉菊の露 上・下」澤田ふじ子（昭和六十二年 中公文庫）
- 六 「裏葉菊」真野ひろみ（平成十三年 講談社）
- 七 「偽りの明治維新 会津戊辰戦争の真実」星亮一（二〇〇八年 大和書房）
- 八 「戊辰凌霜隊始末 春の嵐」帝国劇場で公演（昭和四十七年四月）
- 九 「戊辰炎上 郡上藩凌霜隊始末記」福島テレビで放映（昭和六十三年十二月四日）
- 十 「激浪 郡上藩凌霜隊記」劇団ともしび 郡上市文化センターで公演（平成十七年十一月）